

登録コード	UAA49500	開講年度	2026				
授業題目	芸術コミュニケーション実践演習Ⅱ			担当教員	金井 直		
				副担当	濱崎 友絵		
単位数	2	講義期間	後期	曜日・時限	水曜・1時限		
				授業形態	演習		
信大コンピテンシー	該当						
(1)授業の達成目標	授業で得られる「学位授与の方針」			⇔	【授業の達成目標】		
	2 6 UAカリ・総人社・人間文化学, 2 5 UAカリ・総人社・人間文化学						
	【人間文化学】思想、歴史、社会、情報、言語、芸術など多種多様な側面を持つ人間文化に関する深い素養と幅広い理解を基盤として、その文化を継承し、柔軟な感性と創造的な論考により専門領域の問題を客観的・学問的に究明し、独自に理論を構築する能力や仮説を検証する能力を有する。			⇔	芸術について、柔軟な実践と創造的な論考により問題を客観的・学問的に究明し、独自の理論構築や仮説検証ができるようになる。		
	【人間文化学】人間と社会を探究する学問分野間の総合的な知見を活かし、俯瞰的な視野で課題を捉える力を有する。			⇔	芸術について、柔軟な実践と創造的な論考により、俯瞰的な視野で問題を捉えることができるようになる。		
(2)授業の概要	芸術コミュニケーション実践演習Ⅰの学修成果を基盤に、受講者独自の視点と問題意識に支えられた研究活動をアクティヴ・ラーニング方式でひきつづき指導・支援し、その研究成果を公表するための方法を、理論・実践の両面において教授する。キー・コンセプトは「コミュニケーションとハイブリディティ」。開かれた知と他者理解をあわせて実現する芸術をめぐる学の可能性について、実践的に考察する。						
(3)授業計画	第1回：ガイダンス「コミュニケーションとハイブリディティ」 第2回：研究対象の再検討 第3回：先行研究の再確認・再検討 第4回：一次資料等の再確認・再検討 第5回：調査等準備 第6回：関連資料分析 第7回：調査報告 第8回：研究経過の報告と討議 第9回：研究課題の調整 第10回：調査報告（継続） 第11回：関連資料分析（継続） 第12回：調査報告と資料分析のまとめ 第13回：研究発表案の呈示と討議 第14回：研究発表と質疑応答 第15回：研究の進捗状況の確認と今後の展望 期末試験の有無 なし						
(4)成績評価の方法	以下を総合して判定する。 各回の課題60%、第14回の研究発表とそれに関連する事前事後の学習40% ※評価割合は若干の調整を行うことがある。 得点率による評価基準は次のとおりとする。 90%以上 秀、89-80% 優、79-70% 良、69-60% 可、59%以下 不可。						
(5)成績評価の基準	【卓越している】芸術コミュニケーション実践演習（リサーチ・ベース）の学修成果を基盤に、独自の視点と問題意識に支えられた研究を進め、その成果を公表する力において、極めて高い水準にある。 【かなり上にある】芸術コミュニケーション実践演習（リサーチ・ベース）の学修成果を基盤に、独自の視点と問題意識に支えられた研究を進め、その成果を公表する力において、非常に高い水準にある。 【やや上にある】芸術コミュニケーション実践演習（リサーチ・ベース）の学修成果を基盤に、独自の視点と問題意識に支えられた研究を進め、その成果を公表する力において、高い水準にある。 【その水準にある】芸術コミュニケーション実践演習（リサーチ・ベース）の学修成果を基盤に、独自の視点と問題意識に支えられた研究を進め、その成果を公表する力において、一定水準にある。						
(6)事前事後学習の内容	事前学習として、毎回の研究課題への対応が不可欠。また各回の事後学習を、第14回の研究発表の基盤とすること。						
(7)履修上の注意	自身の関心領域を明確にすると同時に、隣接領域の論文等にも触れながら、芸術研究の多様な方法について、理解を深めておくこと。 研究発表に向けて、じゅうぶんな資料読解と調査を期待する。 自主的に鑑賞経験を積み上げ、多様な芸術表現についての知識と関心を高めておくこと。						
(8)質問,相談への対応	まず以下のアドレスにメールにて問い合わせること。 kanait@shinshu-u.ac.jp						
【教科書】	なし。						
【参考書】	Jerrold Levinson, The Oxford Handbook of Aesthetics, Oxford Univ., 2005. ほか						